

『翻訳満語纂編』の語釈における日本語の誤訳について

著者	松岡 雄太
雑誌名	長崎外大論叢
号	21
ページ	61-73
発行年	2017-12-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1165/00000581/



*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No. 21 2017*

『翻訳満語纂編』の語釈における日本語の誤訳について

松 岡 雄 太

Some Mistranslations from Manchu to Japanese
in *Honyaku Mango Sanhen*

MATSUOKA Yuta

長崎外大論叢

第21号
(別冊)

長崎外国語大学
2017年12月

『翻訳満語纂編』の語釈における日本語の誤訳について

松岡雄太

Some Mistranslations from Manchu to Japanese
in *Honyaku Mango Sanhen*

MATSUOKA Yuta

Abstract

During the mid-nineteenth century, Chinese translators in Nagasaki edited the Manchu-Japanese dictionary, *Honyaku Mango Sanhen* (翻訳満語纂編). This dictionary presents each Manchu headword with a Chinese translation, and a definition rendered in both Manchu and Japanese.

This paper discusses some mistranslations from Manchu to Japanese in the definition employed by the translators. Although there are individual differences, many mistranslations have arisen from a lack of understanding of the complex sentence structure, such as the relative clause and the coordinate clause in particular.

キーワード：『翻訳満語纂編』、満洲語語釈、誤訳

1. はじめに

19世紀半ばに長崎唐通事が編纂した2種類の満洲語辞書、『翻訳満語纂編』（5巻10冊）と『翻訳清文鑑（清文鑑和解）』（4巻5冊）⁽¹⁾は、日本の満洲語学における初期の成果物であり、これらの辞書の綿密な分析を通して、当時の唐通事らがどのようにして満洲語を学び、またどれほど満洲語を理解していたのかが分かる。2種類の辞書は共に18世紀の中国で刊行された『御製増訂清文鑑』（以下『清文鑑』と表記）を底本に編まれたもので、共に見出し満洲語の右横にふされた、満洲文字の読み方を示すかな表記と、満洲語語釈の右横にふされた日本語訳が、これらの辞書独自の箇所である。本論文では、このうちの後者、すなわち満洲語語釈にふされた日本語訳に見られる誤訳と思わしき箇所について考察する。これらの誤訳例を分析することによって、唐通事らがどれほど満洲語に通じていたかの一端を明らかにできると考える⁽²⁾。

まずはじめに、満洲語語釈に対する日本語訳がどのような原則に基づいてふされたのかについては、『翻訳満語纂編』巻1をもとに、松岡（to appear）で既に明らかにしたところである。同論文での結論は、以下の(1)に挙げる通りである。

(1) 日本語訳の原則

- a. 逐語訳を原則とする。
- b. まずは『清文鑑』の漢語訳をそのまま利用する。ただしその漢語のままでは日本語として解しにくい場合、随時漢語にルビをふす。

- c. 語句の意を十分に解している者は漢語訳をそのまま用いず日本語で翻訳する。その際、方言を使っている者もある。
- d. できるかぎり日本語として自然な文になるように意識することもある。

だが(1)の原則において課題として残っていたのは、(d)の意識をどのように判断するか、である。例えば、上原(1971:20)は、以下の(2)~(4)を誤訳の例として挙げている。

- (2) giranggi be simhun **hefeli** -i gese duin -i durbejen ninggun dere obume
 骨 ヲ 指 ^{サキ}肚 ノ 程ニ 四 ^{カク}楞 六 面ニ シテ
 arafi ninggun dere de emu ci ninggu de isibume tongki fetefi moro
 拵へ。 六 面 ニ 一 ヨリ 六 ニ 至ルマテ 星ヲ ^{ホリ}創。 碗
 fengseku de maktame efirengge be sasuku[sic.sesuku] sembi.
^コ小 ^{サラ}盆子 ニ抛テ ナクサム者 ヲ。 骰子 ト云フ。

[sesuku 骰子: 上33a 石寄親之]

- (3) emu aniya ogoro **unde** jakūn biyai niyahan be, nuhere sembi.
 一 年ニ ナルヲ **未シク**。 八 ^{ツキ}月ノ ^{イヌゴ}狗子 ヲ。 小狗 ト云。

[nuhere 小狗: 上19a 高尾延之]

- (4) (前略) gemun hecen be toktobufi mukden ci **ebsi** gurime jihe manggi,
 京 城 ヲ 定メ 盛京 ヨリ **シテ** 遷リ 来シ 時。
 esebe im(iya)ngga jasei tule dabagan -i fisa ergi (de) guribufi, (後略)
 此輩ヲ 邊 外 關 山 ノウシロノアタリ ニ □□⁽³⁾

[cahar jakūn gūsa 察哈爾八旗: 下16a 颯川雅範]

(2)の「hefeli」は「腹」なのであるから「肚^{ハラ}」とルビをふすべきで、(3)の「unde」は「一年になる前に」、(4)の「ebsi」は「盛京からこちらへ移って来た時」というふうに訳出すべきだという指摘である。

これに対し、松岡 (to appear) は(2)の例を誤訳と認めるべきではないと主張した。すなわち、「肚」と漢字表記してあるのは『清文鑑』におけるこの語の漢語訳が「肚」となっているのをそのまま援用したものであり、ルビに「サキ」とふしてあるのは「指先(ユビサキ)」という自然な日本語にしようとした結果だとの指摘である。だが一方で、(3)、(4)を含め、誤訳とすべきかどうか判断しかねる例も散見する。以下、類例を挙げる。まず、(5)と(6)は語句レベルにおける例である。

- (5) tabuha beri -i uli **golmin arafi** musen cinggiya be mise sembi.
 張りタル 弓 ノ 絃 ノ **ビ**。 胴 ユルム ヲ。 弓弩 ト云。

[mise 弓弩: 下12b 颯川道香]

(5)の「golmin arafi」は直訳すると「長く作って(して)」であるが、颯川道香はこれだと日本語として不自然だと思ったのか、「ノビ」と意識している。だが、これは敢えて正確に理解するなら「長くする」のだから「ノバシ」にすべきとも言える。つまり、「beri -i uli」が目的語なのを正確に理解

しているかという問題である。恐らく颯川道香は満洲語の主格がゼロ語尾で表されるのを理解しており、「beri-i uli」を主語と判断したものと思われるが確証はない。だが、この訳でも語釈の文意を著しく損ねているわけではないから、誤訳とすべきかどうか判断に迷うのである。

- (6) undurakū de (u)lhun meiretu adasun sindame yangseleme weilehe hehe
 龍ノ織リモノニ。領^{エリ}子。護^{カタアテ}肩。大^{オロエリ}襟ヲ □ケ。カザリテ 造リシ。女^{オム}
 niyalma eture **doroi etuku** adali ergume be, cuba siji(g)iyān sembi.
 人^ナノ 着ル **男ノ 朝服ニ** 同□ 朝衣 ヲ。女 朝衣 ト云。

[cuba sijigiyān 女朝衣: 下18a 颯川雅範]

(6)の「doroi etuku」は『清文鑑』の見出し語句にあり、漢語訳は「朝服」とある。(6)は『清文鑑』の漢語訳をそのまま使うのではなく、さらに「男ノ」を補足している。「女朝衣」の語釈なので、男女の違いを強調したかったのかもしれないが、「男ノ」を入れるべき必然性はない。だが、これも余剰的になっているだけで文意を著しく損ねているわけではない。

次に、(7)と(8)は文法レベルにおける例である。

- (7) **šu ilhai da be muke suwaliyame** hujurefi muke be sekiyefi funcehe
 蓮 根ニ 水ヲ マゼ 摺オロシ。水 ヲ シタメ。剩^{ノコリ}タル
 fiyen -i adali, da be šufin sembi, erebe šatan ucufi fuyere mukei
 白粉 ノ 如キ センヲ 藕粉 ト云フ。是ヲ 白砂糖ニアワセ。滾^{ニエ} 湯ヲ
 hungkerefī ukiyembi.
 サシテ 喝^{□□}ルナリ。

[šufin 藕粉: 上42b 游龍俊之]

(7)の下線部を直訳すると「蓮根を水に(と)混ぜ合わせ」である。水と蓮根のどちらが先かあるいは同時か、助詞の順序が異なると、厳密には表わされる手順も異なるのだろうが、これも語釈の文意を著しく損ねているわけではない。訳編者の游龍俊之は、恐らく満洲語の助詞の使い方をきちんと理解しており、その上で「蓮根ニ水ヲマゼ」のほうが日本語の語順としてより自然と思ったくらいの判断だったのだろうか。

- (8) (前略) geli sunja tanggū aniya **oho manggi** šanyan ombi, geli sunja tanggū
 又 五 百 年ニ ナリシトキ。白ニ ナル。又 五 百
 aniya **oho manggi** yacin ombi.
 年ニ ナリシトキ。青ニ ナル。

[buhū 鹿: 上29a 石寄親之]

(8)の「manggi」は、後置詞的に「～した後で、～したら、～すると」といった意味で用いられる(河内・清瀬 2002、津曲 2002)。『清文啓蒙』巻3「清文助語虚字」にも記述があり、そこでは「了之後字。而后字。既而字」となっている。この「manggi」を「トキ」と訳しても語釈の文意を損ねるわけではないが、以下の(9)と比べたとき、日本語訳が同じになってしまう。なお、訳編者石寄親之が(8)

の「manggi」を「トキ」と訳したのは『清文鑑』の「manggi」の漢語訳が「到那時」となっていたためだと考えられる。

(9a) bele jeku be, aika jaka de tebure de, baitalara tetun -i gebu, (後略)

米 穀 ヲ。ナニソノ 器 ニ 入ル、トキ。用ユル 器 ノ 名。

[belei sihabukū 米漏子: 上26a 彭城廣林]

(9b) (前略) muke labdu ohode sangga deri muke dendere tampin de eyebufi, (後略)

水 多ク ナリシ時 穴 ヨリ 分 水 壺 ニ 流。

[muke be necin obure tampin 平水壺: 下15a 穎川道香]

以上、本論文では上記の(2)及び(5)～(8)のような例を積極的に誤訳とは認めず、語句の意味、あるいは文の意味を正しく理解できなくなる恐れのあるものを誤訳と認め、以下、『翻訳満語纂編』巻1を対象にその例を挙げる。結論から先に述べると、誤訳例はごく少数であり、巻1に関しては全体的に正しく翻訳できていると筆者は判断する。なお、巻1の編纂にかかわった訳編者は以下の(10)に挙げる14名である。

(10) 巻1の訳編者

	字頭	語数	訳編者
上 卷	a, e, i, o, u, ū	20	鄭永寧
	na, ne, ni, no, nu, ka	31	高尾延之
	ga, ha, ko, go, ho, kū	20	神代定光
	gū, hū, ba, be, bi, bo	25	彭城廣林
	bu, pa, pe, pi, po, pu, sa, se	30	石寄親之
	si, so, su, ša, še, šo, šu	33	游龍俊之
	ta, da, te, de, to, do	40	彭城種美
下 卷	tu, du, la, le, li, lo	40	穎川春重
	lu, ma, me, mi, mo, mu	30	穎川道香
	ca, ce, ci, co, cu, ja	18	穎川雅範
	je, ji, jo, ju, ya, ye	30	彭城雅美
	yo, yu, ke, ge, he, ki	40	鉅鹿篤義
	gi, hi, ku, gu, hu, fa	22	蘆塚恒徳
	fe, fi, fo, fu, wa, we	24	彭城昌宣

2. 誤訳

2.1. 語句に関するもの

まずは語句に関する誤訳の例から見てみる。

(11) silmen -i jergi jaka be budara[sic.butara] de, mergen cecike be daniyan

^{スミタカ} 雀鷹 等ノ 物 ヲ 取ル ニ。 カシコキ 小鳥 ヲ 木カケ

huye -i juleri gobolobume dobumbi tulere, silmen jici mergen cecike

^{フナ} 鳥套 ノ 前ニ 見エル様ニ 網ハリテ 掛置ナリ。^{スミタカ} 雀鷹 来レハ 小 鳥

neneme serefi kūlisitame arbušara be niyalma sabufi **tusihyan**[sic.tusihiya]

先ニ 知り 恐レテ ^{ウコキタツ}動作 ヲ 人 見テ。 **カノ網**

be tatame butambi, erebe suberhe sembi.

ヲ 引シメテ 取ル。 コレヲ 苗子 ト云フ。

[suberhe 苗子: 上39a 游龍俊之]

(11)の「mergen cecike」は「giyahūn cecike (もず)」の別名として『清文鑑』の見出し語句にも出ており、漢語訳は「寒露」とある。だが、游龍俊之はこれを「mergen」と「cecike」それぞれに分けて翻訳している。また、3行目の「tusihya」を「カノ網」と訳しているのも気になる。「その網」といった程度に訳しているのかもしれないが、「tusihya」は『清文鑑』の漢語訳に「鷹網」とあることから、「タカノ網」と書きたかったのかもしれない。なお、2行目にある「dobumbi tulere」も誤訳と思われるが、この点については2.2で後述する。

(12) [= (7)] šu ilhai da be muke suwaliyame hujurefi muke be sekiyefi funcehe

蓮 根 ニ 水ヲ マゼ 摺オロシ。水 ヲ シタメ。 ^{ノコリ}剩タル

fiyen -i adali, **da** be šufin sembi, erebe šatan ucufi fuyere mukei

白粉 ノ 如キ **セン** ヲ ^{ニエ}藕粉 ト云フ。是ヲ 白砂糖ニ アワセ。 ^{ニエ}滾 湯ヲ

hungkerefī ukiyembi.

サシテ ^{□□}喝ルナリ。

[šufin 藕粉: 上42b 游龍俊之]

(12)は上記の(7)と同じ「šufin」の語釈である。2行目に出てくる「da」を「セン」としているのは意識にしてはやや都合が悪い。ここの「da」は「根」の意味であり、品詞が違うのもさることながら、「muke be sekiyefi funcehe fiyen i adali, da (水を切って残った白粉のような根)」が「šufin (藕粉)」なのだという説明からもやや離れていると思われる。

(13a) ijifun niyehe de dursuki, boco suway**akan**.

^ヲ鴛 ^シ鴛 ニ 相似タリ。色 ^ホ黄也。

[lama niyehe 土鴛鴦: 下5a 颯川春重]

(13b) šan -i sen arafi dube ergi be ilan (ge)cehengge obufi ilkin[sic.ilgin] sukū

ミ ノ アナヲ 作り サキノ 方 ヲ 三ツニ カトダツヤウニ ナシ。スリ皮 ア□皮

-i jergi mangg**akan** jaka be ufirengge be temene ulme sembi.

等ノ ^{カタキ}硬 品 ヲ 縫モノ ヲ 三楞鍼ト 云。

[temene ulme 三楞鍼: 上47a 彭城種美]

(13c) guise de adalika bime nekeliyen undehe be sukū -i borime[sic.burime]

^{ヒラキヒツ}臥櫃 ニ 畧同 クシテ。 ^{ハリ}薄キ 板 ヲ 皮 ニテ 緋。

halfiy**akan** weilefi aika jaka teburengge be pijan sembi.

^{スロシヒラタク}畧扁 ^{ナニカノ}拵へ。何 物ヲ 入レルモノ ヲ。皮箱 ト云フ。 [pijan 皮箱: 上31a 石寄親之]

(13d) beye holfiy**akan** bime golmin, jalan jalan -i banjihabi, (後略)

身 **ヒラタク** シテ 長ク。 ^{ヒトツギ}節 節 アリテ生レリ。

[šešeri umiyaha 蜈蚣: 上40b 游龍俊之]

(13)の「-kan」は「やや、わずかに」といった意味を表す接辞だが、これを(13a)のように「ホボ」と訳すのは意味合いが異なると思われる。「畧」という漢字が当てられているのは『清文鑑』の漢語訳がそうになっているからだと考えられる。また、(13b)のように「-kan」を完全に無視して翻訳している者もある。一方、(13c)、(13d)の例では「-kan」を正しく理解している。ここから日本語への訳出には個人差があることが分かる。なお、訳編者頼川春重以外にも(13a)のように「-kan」を「ホボ」と訳している者は多く、彭城種美(tojin 孔雀:上49a ほか)、鉅鹿篤義(kiyakū 昂刺:下32a ほか)⁽⁴⁾、彭城昌宣(fulan 青馬:下40a ほか)にも確認される。また、(13b)のように「-kan」を無視している者に、頼川道香(molo 楓樹:下13a)、彭城雅美(jelu 白肚鱒魚:下20a)がある。

2.2. 文法に関するもの

次に文法に関する誤訳の例を見てみる。

2.2.1. 助詞に関する誤訳

- (14) hiya sai dorgici sain sain ningge be (sonjofi) ejen -i hanci
 侍衛ノ輩ノ内。義姣^{ミメヨキ}モノヲ選ミ。御前近ク
 eršerengge be, gocika hiya sembi.
 服事^{ツカユルモノ}ヲ。御前侍衛ト云 [gocika hiya 御前侍衛: 上22a 神代定光]

(14)の「dorgici」は「内ヨリ」と訳するのが適当であろう。「ヨリ」がなくても文意が通じなくなるほどではないが、助詞の「ci」を省略する積極的な理由はない。この点については、以下の3章で再度言及する。

- (15) jakūn gusai manju monggo ujen cooha nikan hafasai fulun -i
 八旗ニテ。満州。蒙古。漢^{カラ}ノ。軍卒。漢^{カラ}ニテ官人ノ俸禄ノ
 menggun bele, coohai ursei caliyān bele be some bodobure baita
 銀米。兵丁ノ錢糧ヲ。勘定スル事
 be alifi baicara ba be, fulun be kimcire tinggin sembi.
 ヲ承ハリ査^{シラ}フル處ヲ。稽俸廳ト云。
 [fulun be kimcire tinggin 稽俸廳: 下39b 彭城昌宣]

(15)の1行目にある「nikan hafasai」を「漢ニテ官人ノ」と訳しているのは誤訳と認めてよかろう。文頭の「jakūn gusai」を「八旗ニテ」と訳していることから、「jakūn gusa」と「nikan」が並列関係にあるような解釈になってしまう。正しくは「八旗の満洲人、モンゴル人、漢軍、漢人の役人の俸禄…」程度の意である。

- (16) dorgi tulergi manju nikan bithei hafasai wesire forgošoro niyeceme
 内外満漢ノ文官等ニ。隆轉補

sindara ilgame gisure^{re}, weile gisure^{re}, fungnere be baire hafan sirara
 授スルヲ 辦 論シ。 罪ヲ 論シ 封贈 ヲ 求^{モト}メ 官ヲ 嗣^{ツク}
 jergi baita be uheri kadalame icihiyara amba yamun be hafan -i jurgan
 等ノ 事 ヲ。 總^{ツカサ}ベ 督^{トリ}トリテ 辨^{トリハカラフ}理 大 衙門 ヲ。 吏 部
 sembi.

ト云。

[hafan -i jurgan 吏部: 上22a 神代定光]

(16)の1行目にある「manju nikan bithei hafasai」を「満漢ノ文官等ニ」と訳すと文意が正しく伝わらない。「ニ」にすると「文官等に対して」という解釈になるが、それを受ける動詞が見当たらない。正しくは「…文官等ノ」とすべきであろう。文の構造は「dorgi tulergi manju nikan bithei hafasa」の(が)、①「wesi-」、②「forgošo-」、③「niyeceme sinda-」、④「ilgame gisure-」、⑤「weile gisure-」、⑥「fungnere be bai-」、⑦「hafan sira-」することなどを「uheri kadalame icihiya-」する「amba yamun」である。

2.2.2. 文の構造に関する誤訳

(16)で文の構造に関する例を見たが、同様に連体節の構造を意識した結果、文意が伝わりにくくなった例が比較的多く見られる。

(17a) sele be gargangga arafi moo -i fesin sindahangge be, šaka sembi, **afara**
 鉄 ヲ フタマタニ 作り。 木 ノ 柄ヲ スケタルモノ ヲ。 又 ト云フ。 **戦ヒ**
 de baitalara agūra.

ニ 用ユル 器物ナリ。

[šaka 又: 上39a 游龍俊之]

(17b) sele be dabtame jeyen gencehen tucibufi homhon de sisifi asharangge
 鐵 ヲ キタヒテ 刃^ハ 刀背^{ム子}ヲ タテ。 刀鞘^{サヤ} ニ 挿^{ヲサメ} 佩^{ヲビ}タル者
 be, loho sembi, tuwakiyara **afara** beye be seremšere de baitalara agūra.
 ヲ。 腰刀 ト云。 守リ **戦ニ** 身 ヲ 防グ ニ 用ユル 器物也。

[loho 腰刀: 下7b 穎川春重]

(17a)の「afara」は動詞の連体形で、直訳すると「戦うときに」のようになるが、これを名詞のように意識している。この(17a)は意識として問題ないと考えるが、(17b)の2行目にある「afara」を「戦ニ」と名詞のように訳出しているのは問題である。これは直前の「tuwakiyara」と対になっているので、このように訳してしまうと文意が伝わりにくくなる。正しくは「tuwakiyara afara beye」を「守り、攻める身」のようにすべきである。

(18a) kubun use be niyefefi ebeniyefi, hergame **araha** nadan afaha
 棉ノ 實 ヲ。 研^{フロン} 水ニヒタシ 紋^{スジ}ヒキ **作り** 七 張^{マイ}
 holboho hoošan be, nadangga hoošan sembi, hacingga boco icefi baitalambi.
連^{ツフイタル} 紙 ヲ。 連七紙 ト云。 彩 色ニ 染メ 用フル。

[nadangga hoošan 連七紙: 上15b 高尾延之]

- (18b) dukai bokson de adame sindaha emu ergi jiramin teksin emu erg(i)
 門ノ ^{シキミ}檻 ニ ソエ オキタル 一 ^{スミ}方ヲ 厚ク 功ソロエ 一 ^{スミ}方ハ
 nekeliyen araha sejen -i muheren be alire moo be dabakū sembi.
 薄スク ナシテ。車 ノ 輪 □ ウケナカス木 ヲ。踏躑□ 云。

[dabakū 踏躑: 上45b 彭城種美]

(18a) の1行目の「araha」は連体形になっているのを「作り」と連用形のように訳出している。だがこれは前半の「kubun use be niyefi ebeniyefi, hergame ara-」と後半の「nadan afaha holbo-」が共にその直後に来る「hoošan」に並列的にかかっていることを意識した意訳と考えられるので、誤訳とは言えまい。一方、(18b) の2行目の「araha」も「ナシテ」と連用形のように訳出しているが、これは文意がやや分かりにくくなっている。「emu ergi jiramin teksin」と「emu ergi nekeliyen」が対になり、共に「araha」にかかっていることが分かるようにすべきであろう。つまり、「一方を厚くして揃え、一方を薄くした車の輪」といったふうに訳出すべきである。

次に、以下の(19)と(20)は、連体形を終止形のように訳出した結果、文意が分かりにくくなった例である。

- (19) booi sihin de kidara[sic.gidara] jerin bukdame araha wase be, jeringge
 家ノ 簷 ニ フクナリ。 ^{ノキバ}端ニ 折カケテ 作りタル 瓦 ヲ。花邊瓦
 wase sembi.

ト云。

[jeringge wase 花邊瓦: 下20b 彭城種美]

- (20) tohoma be tufun de hishaburakū seme tufun -i teisu hadara
^{アツリ}轆 ヲ ^{アブミ}鐙 ニテ ^{スリ}錫 キラヌヤウニ ^{アブミ}鐙 ニ ^{ムキアワセ}相對 ヌイツケルナリ。
 su(kū) niyecen -i jergi hacin -i weilehengge be tohoma -i daldaku
 皮 ^{ヲ、イ}補 ノ 様ナルモノ、 作りタルモノ ヲ 鐙磨ト
 sembi.

云。

[tohoma -i daldakū 鐙磨: 上48b 彭城種美]

(19)は「booi sihin de gida-」と「jerin bukdame ara-」が共に「wase」にかかっていることが分かるようにすべきであろうし、(20)も前半の「tohoma be tufun de hishaburakū seme tufun i teisu hada-」と後半の「sukū niyecen i jergi hacin i weile-」が共に「-ngge」にかかっていることが分かるようにすべきであろう。このように連体形を終止形のように訳出した結果、文意が不明瞭になった例はほかに、颯川道香 (midari ujui [sic.madari uju] 獸面: 下12a) と彭城種美 (yekengge haha 大丈夫: 下24b) の担当箇所にも確認される。

次に、(17)~(20)と同様、文の構造にかかわるもので、用例は多くないが、終止形を意識した結果、文意が分かりにくくなった例も見られる。

- (21a) fulehe be boihon de teburakū silame -i bade lakiyafi, muke cai -i
 根 ヲ 土 ニ 栽エズ。蔭 ノ 處ニ ツリ。水ヤ 茶 ヲ

fisihime simebuci, ini cisui cikten abdaha **banjimbi** ilha ilambi, abdaha
 振カケ 潤ホセハ。自然ニ 茎 葉 **生エ**。花 開也。葉ハ
 tuweri juwari enteheme niowanggiyan, ilha sohokon šanyan gubsu šungkeri
 冬 夏 永ク 青ク。花ハ スコシ黄ニシテ 白シ。^{ハナヅキ} 朶ハ 蘭
 ilha ci narhūn.

ヨリ 細シ。

[edungge šungkeri ilha 風蘭: 上11a 鄭永寧]

- (21b) [= (11)] silmen -i jergi jaka be budara[sic.butara] de, mergen cecike be
^{スミタカ} 雀鷹 等ノ 物 ヲ 取ル ニ。カシコキ 小鳥 ヲ
 daniyan huye -i juleri gobolobume **dobumbi tulere**, silmen jici mergen
 木カケ 鳥套^{フナ} ノ 前ニ 見エル様ニ **網ハリテ 掛置ナリ**。^{スミタカ} 雀鷹 来レハ 小
 cecike neneme serefi kūlisitame arbušara be niyalma sabufi
 鳥 先ニ 知り 恐レテ ^{ウコキタツ} 動作 ヲ 人 見テ。
 tusihiyan[sic.tusihiya] be tatame butambi, erebe suberhe sembi.
 カノ網 ヲ 引シメテ 取ル。コレヲ 苗子 ト云フ。

[suberhe 苗子: 上39a 游龍俊之]

(21a) の2行目にある「banjimbi」は終止形であるが、これを「生エ」と連用形のように訳出している。だが、これは「cikten abdama banji-」がその直後に来る「ilha ila-」と並列関係にあると見た意識と考えられるため、誤訳とは言えない。しかし、(21b) の2行目にある「dobumbi tulere」を「網ハリテ 掛置ナリ」と訳出しているのは誤訳と見なしてよかろう。2行目は「dobumbi」で文が切れており、「tulere」はその直後に来る「silmen」にかかっている。これを意識と見なすのは難しい。

2.3. その他の誤植

本章の最後に、満洲語語釈の日本語訳中に見られる細かな誤植を指摘しておく。

- (22) tahūra -i tolo[sic.dolo] banjimbi boco šeyen bime muheliyen elden bi,
^{ハマクリ} 蛤 ノ 内ニ 生ル。色 ^{マシロク} 雪白 シテ 圓ク。光リ 有リ。
 amba ajige adali akū **miyamigan de** baitalambi.
 大 小 同シ カラズ。^{カザリニ} **飾** ニ 用フル。 [nicuhe 珍珠: 上17b 高尾延之]
- (23) beye amba yasa ajige, šan labdahūn angga -i argan eici juwe duin
 身 大クシテ 目 小シ。耳 垂サカリテ。 獠牙 或ハ 二ツ 四ツ
 ninggun adali **akū**. (後略)
 六ツナルモノ 同シ **ナカス** [sufan 象: 上38b 游龍俊之]
- (24) juwe songgiha tabure fitheku beri be, juru songgiha fitheku beri
 二ツノ ^{ハジキヲ} 夾子支棍。^{カケル} 勾 ^{石シ} 努 弓 ヲ。雙 機 **努**ト
 sembi.
 云フ。 [juru songgiha fitheku beri 雙機弩: 下23a 彭城雅美]

(22)は「miyamigan」の「飾」のルビに「カザリニ」とある。直後の「de」を「ニ」と訳しているの
 ルビは「カザリ」でよい。(23)は「akū」の訳に「ナカス」とあり、意味が不明である。他の箇所
 の日本語訳から推測して「カラス」の誤りであろう。(24)は「雙機弩」の語釈であるが、日本語
 訳の漢字が「雙機努」となっている。写し間違いだろうか。

(25) niyengniyeri ome a -i sukdun de, juhe fusur seme hūsun akū
 春ニ ナリ 陽ノ 氣 ニテ。氷 □ ニ 力 ナ□

[juhe sulhumbi 氷酥: 下22b 彭城雅美]

(25)は満洲語の語釈が途切れている。『清文鑑』の「juhe sulhumbi」の語釈は「niyengniyeri ome
 a i sukdun de juhe fusur seme hūsun akū oho be juhe sulhumbi sembi.」(巻2. 時令部. 時令類
 9-23) となっているので、これも写し損ないと考えられる。

(26) morin ulha nilhūn ba be yabure de kanggararakū be, šoforo sain
 馬 ナトノ。滑カナル 処 ヲ 行ク ニ ヨロメカザル ヲ。馬把滑
sambi[sic.sembi].

[šoforo sain 馬把滑: 上41a 游龍俊之]

最後に、(26)の最後の「sambi」は「sembi」の誤りだが、この日本語訳が欠けている。「sembi」と
 いう語は頻度も高く、游龍俊之もほかの語句の語釈に現れる「sembi」をきちんと「ト云」と訳出
 していることから鑑みても、この箇所は単なる見落としと考えられる。

3. 『翻訳清文鑑 (清文鑑和解)』との比較

2章では、『翻訳満語纂編』巻1を対象に、満洲語語釈にふされた日本語訳のうち、誤訳と認めら
 れるものの性格について見てきた。ところで、『翻訳満語纂編』の収録語彙は、底本である『清文鑑』
 全32巻の中から適宜語句を抜き出し、それを各巻ごとに十二字頭順に配列しなおしたものである⁽⁵⁾。
 一方で、『翻訳満語纂編』と同時期に編纂された『翻訳清文鑑 (清文鑑和解)』は、同じ底本の『清文
 鑑』巻1から巻4までをほぼ忠実に訳出したものである。つまり、『翻訳満語纂編』の収録語句のうち、
 『清文鑑』巻1から巻4の中から抜き出したものは、自ずと『翻訳清文鑑 (清文鑑和解)』にもその語
 句が収録されていることになる。

本章では次に、『翻訳満語纂編』に見られる誤訳が『翻訳清文鑑 (清文鑑和解)』ではどうなってい
 るのかについて若干の考察を加えたい。結論から言えば、残念ながら、本論文で見てきた誤訳と認め
 られる用例のうち、『清文鑑』巻1から巻4の中から抜き出されたものは2例しかない。以下の(27a)
 と(28a)がその2例である。これらと同じ語句の『翻訳清文鑑 (清文鑑和解)』の用例がそれぞれ(27b)
 と(28b)である。

(27a) [= (14)] hiya sai dorgici sain sain ningge be (sonjofi) ejen -i hanci
 侍衛ノ輩ノ 内。 義姦 モノ ヲ 選ミ。 御前 近ク

eršerengge be, gocika hiya sembi.

^{ツカユルモノ}服事 ヲ。御前侍衛 ト云 [gocika hiya 御前侍衛: 上22a 神代定光]

(27b) hiya sai dorgici sain ningge be sonjofi, ejen i hanci eršerengge be,
衆侍衛ノ内ヨリ。佳者ヲ選ミテ。主上ノ近服者ヲ。
gocika hiya sembi.

御前侍衛 ト云。 [gocika hiya 御前侍衛: 卷4 22 a 穎川春重譯述・鄭永寧校合]

(27a) は「dorgici」の「ci」を訳出せずに省略していた例であったが、それに対応する (27b) を見ると、きちんと「ヨリ」と訳出していることが分かる。これ以外の語句の日本語訳も若干異なる。例えば、「eršerengge」を『翻訳満語纂編』では「^{ツカユルモノ}服事」と訳出していたが、『翻訳清文鑑(清文鑑和解)』では「^{ツカフル}服者」としている。ルビは「モノ」となっているが、「御前侍衛」の説明なのだから、漢字も「事」よりは「者」の方が適当だろう。この27の1例に関する限り、神代定光より穎川春重の方に分がありそうである。

(28a) [= (4)] (前略) gemun hecen be toktobufi mukden ci **ebsi** gurime jihe manggi,
京城ヲ定メ盛京ヨリシテ遷り来シ時。
esebe im(iya)ngga jasei tule dabagan -i fisa ergi (de) guribufi, (後略)
此輩ヲ邊外關山ノウシロノアタリニ □□

[cahar jakūn gūsa 察哈爾八旗: 下16a 穎川雅範]

(28b) (前略) gemun hecen be toktobufi mukden ci **ebsi** gurime jihe manggi,
京城ヲ定メ。盛京ヨリ^{コナタ}這裡へ遷り来シケレバ。
esebe imiyangga jasei tule dabagan -i fisa ergi de guribufi, (後略)
是等ヲ邊外關山ノ^{ウラテ}背邊ニ遷シ。

[cahar jakūn gūsa 察哈爾八旗: 卷3 35a 彭城昌宣翻譯・鄭永寧校合]

(28a) は「ebsi」を「シテ」と訳出しており、上原 (1971) が「こちらへ」と訳出すべきと指摘していた例である。対応する (28b) を見ると、「ebsi」は「這裡(コナタ)へ」と訳出されており、奇しくも上原の指摘通りに訳されている。これ以外にもその直後に来ている「jihe manggi」を「来シケレバ」と訳しているのは、上記の(8)で指摘した点を工夫していると言え、総合的に見て、『翻訳清文鑑(清文鑑和解)』の日本語訳のほうがこなれているように感じられる。この28の1例に関する限り、穎川雅範より彭城昌宣の方に分がありそうである。

無論、この1例ずつだけで二人の満洲語能力の違い云々を結論づけられるものではないが、このことは『翻訳満語纂編』と『翻訳清文鑑(清文鑑和解)』共に収録されている『清文鑑』巻1から巻4に典拠を求められる語句を比較すれば、同様に唐通事たちの満洲語能力の差を多角的に明らかにできることを示唆している。

4. 結論

本論文では『翻訳満語纂編』巻1を中心に、満洲語語彙にふされた日本語の誤訳について考察して

きた。誤訳の性格を見ることで、唐通事たちの満洲語能力の一端を窺い知ることができた。ただ、意訳か誤訳かの判断は難しく、明白に誤訳と認められる例はそれほど挙げられなかった。だが、これは裏返せば、唐通事らが短い学習期間なりに満洲語を学び、身につけていたことを示しているだろう。一方で、誤訳の例として比較的多かったのは、文の構造を正しく把握できていない場合であった。これは唐通事が満洲語を学習する際に、あるいは辞書を編纂する際に、与えられた道具が『清文鑑』のみであったことに起因すると考えられる。すなわち、唐通事が用いた『清文鑑』は辞書であるから、みな語句の意味にはある程度精通していたが、文法に疎い者があり、特に複文の構造の理解を苦手としていた者が多かったことを示唆する。

いずれにせよ、誤訳の有無には個人差がある。この個人差の全容解明は今後の課題としたいが、『翻訳満語纂編』巻1における語釈の日本語訳に関してのみ言えば、(10)に挙げた14名のうち、誤訳が1例も確認されなかったのは、鄭永寧と蘆塚恒徳である。この二人に誤訳が見られなかったのは、単にこの二人の担当語句数がそれぞれ20、22と、他の者と比べて少なかったという確率論的な理由かもしれない。だが、少なくとも鄭永寧は『翻訳清文鑑(清文鑑和解)』の編纂にも関与した一人であり、かつ『翻訳満語纂編』の序文に名を連ねる同書の監修者3名のうちの一人である鄭幹輔の子であることからしても、満洲語をよくした可能性が高い。また今回、誤訳が他の者より比較的少なかった高尾延之や鉅鹿篤義は、共に『翻訳満語纂編』巻1～巻5までの5年間、辞書編纂作業に最初から最後まで関与した人物である。やはりほかの唐通事らと比べて満洲語がよくできたのかもしれない。

本論文では『翻訳満語纂編』巻1のみを対象に考察したわけであるが、今後は『翻訳満語纂編』巻2～巻5も同様に考察することで、あるいは同一訳编者における満洲語能力の成長の有無などを明らかにできるだろうし、3章で見たように、『翻訳満語纂編』と『翻訳清文鑑(清文鑑和解)』の収録語句を比較することによって、訳编者間に見られる満洲語能力の差も明らかにできるだろう。

【注】

- (1) 共に長崎歴史文化博物館所蔵。
- (2) 無論、唐通事の満洲語能力は、誤訳の日本語訳からのみ判断できるわけではない。見出し満洲語やその満洲文字の右横にふされたかな表記における誤りも併せて検討する必要がある。見出し満洲語については松岡(2015)を、満洲文字のかな表記については松岡(2013b)を参照のこと。
- (3) 用例中の□は原文が虫喰いなどの理由により判読できない箇所を、()は同様に判読できないが原本の『清文鑑』から推定される箇所を表している。
- (4) ただ、鉅鹿篤義は「gefehe 蝴蝶」(下28b)の語釈では正しく翻訳できている。
- (5) 『翻訳満語纂編』における語句の選抜基準については、松岡(2013c)を参照。

参考文献

- 上原久(1971)「長崎通事の満洲語学」『言語学論叢』11: 13-24.
- 河内良弘(編)(2014)『満洲語辞典』、京都: 松香堂書店
- 河内良弘・清瀬義三郎則府(2002)『満洲語文語入門』、京都: 京都大学学術出版会
- 胡增益(主編)(1994)『新満漢大詞典』、烏魯木齊: 新疆人民出版社
- 竹越孝(2016)『満漢字清文啓蒙〔会話篇・文法篇〕-校本と索引-』、東京: 好文出版
- 津曲敏郎(2002)『満洲語入門20講』、東京: 大学書林
- 羽田亨(編)(1937)『満和辞典』、東京: 国書刊行会

- 松岡雄太 (2013a) 「『翻訳満語纂編』と『清文鑑和解』の編纂過程」『長崎外大論叢』17: 61-80.
- 松岡雄太 (2013b) 「『翻訳満語纂編』の満洲語かな表記について」『満族史研究』12: 27-52.
- 松岡雄太 (2013c) 「『翻訳満語纂編』の語彙選抜基準」In: Kim Juwon and Ko Dongho (eds.) *Current Trends in Altaic Linguistics (A Festschrift for Professor Emeritus Seong Baeg-in on his 80th Birthday)*, 159-202. Seoul: Altaic Society of Korea.
- 松岡雄太 (2015) 「『翻訳満語纂編』の見出し満洲語について」『九州大学言語学論集』35: 329-345.
- 松岡雄太 (to appear) 「『翻訳満語纂編』の満洲語語彙に対する日本語訳の原則」『Contribution to the Studies of Eurasian Languages』20.

* 本研究の一部は、「平成29年度長崎県学術文化研究費補助金（若手等育成型）」（研究課題：「長崎唐通事の満洲語学習と辞書編纂に関する研究」、研究代表者：松岡雄太）の助成を受けて実施されたものである。

